

6 ヴィクター

- ヴィクターは小さな赤ん坊
この世に生を受けました
父親が赤ん坊を膝に乗せて言いました
「家の名を汚してはいけないよ」
- ヴィクターは父親を見上げました 5
大きな丸い目をして見上げました
父親は言いました 「一人息子のヴィクターよ
決して 決して 嘘をついてはいけないよ」
- ヴィクターと父親は 10
小さな二輪馬車で出かけました
父親はポケットから聖書を出して読みました
「心清き者こそ救われる」
- 霜降る師走のことでした
実りの季節が過ぎました
父親が心臓発作で亡くなりました 15
ブーツの紐を結んでいる時のことでした
- 霜降る師走のことでした
父親の埋葬が終わると
叔父さんが ミッドランド銀行に
経理の仕事を見つけてくれました 20
- 霜降る師走のことでした
ヴィクターは 歳まだ 18 でしたが
顔立ちは上品で 背筋は真っすぐ
袖口はいつも清潔でした
- ペペリル通りに部屋を借りました 25
そこは 小綺麗な下宿屋でした
時の翁^{おきな}が 来る日も来る日もヴィクターを見つめました
猫が鼠を見つめるように

| | |
|---|----|
| 同僚が肩を叩いて言いました 「ヴィクターよ 女の味はご存知かい 今度の土曜日 一緒に街に繰り出さないか」 ヴィクターは微笑んで 静かに頭 ^{かぶり} を振りました | 30 |
| 頭取が部屋に座って コロナの葉巻をくゆらしながら 「ヴィクターは確かにいい奴だが 気が小さいのが玉 ^{きず} に瑕」 | 35 |
| ヴィクターは寝室に上がってゆき 目覚まし時計をセットして ベッドに潜って聖書を開き イゼベルの話を読みました | 40 |
| それは4月の最初の日のことでした アンナがペペリル通りにやって来ました その目と唇 その胸と腰 その微笑みが 男どもに火をつけました | |
| アンナは女学生のように清らかに見えました 付き合い始めた最初の日には そうでした でも アンナが身を投げ出した時 その口づけは極上のシャンパンのようでした | 45 |
| 4月2日のことでした アンナは毛皮のコートを着ていました ヴィクターは階段でアンナに出会い 恋に落ちたのでした | 50 |
| ヴィクターが最初にプロポーズした時 アンナは笑って 「結婚なんかする気は無いわ」 二度目は しばらく黙って それから微笑んで 首を横に振りました | 55 |
| アンナは鏡を覗き込み 顔をしかめて眩 ^{つぶや} きました 「ヴィクターは 雨降る午後のように鬱陶しい でも こちらもそろそろ落ち着かなくては」 | 60 |
| 三度目のプロポーズの時 | |

二人は溜め池の側を歩いていました
アンナは額に 息を吹きかけるようなキスをして
「心からあなたが欲しいの」

二人は8月の初めに結婚しました 65
アンナは言いました「坊や キスして」
ヴィクターはアンナを抱き締めて
「ああ トロイのヘレンは僕のもの」

9月の中頃のことでした
ある日 ヴィクターが出勤した時 70
胸のボタン穴に花を一輪差していました
遅刻でしたが 幸せでした

同僚がアンナの噂話をしていました
ドアは少し開いたまま
「可哀想なヴィクターよ でも 75
知らぬが仏と言う通り・・・」

ヴィクターは石像のようになりました
ドアは少し開いたまま
「いい味してたぜ
例のオースティン・ミニの中さ」 80

ヴィクターは大通りをとぼとぼ抜けて
街の外れまで歩いて行って
市民農園場のゴミの山にたどり着きました
涙がぽたぽた落ちてきました

ヴィクターは夕陽を見上げて 85
独り 立ち尽くしていました
「お父さん 天国ですか」
天が応えて「住所不明」

ヴィクターが見上げると
山は雪にすっぽり覆われていました 90
「お父さん 僕は良い子でしょうか」
返ってきた返事は「ノー」

ヴィクターは森までやって来ました
「お父さん アンナは誠実ですよ」

オークとブナの木々が首を横に振って 95
「おまえを騙^{だま}す女だ」

ヴィクターは 風がさっと吹き抜けてゆく
牧草地までやって来ました
「お父さん アンナをととても愛しています」
風は囁^{ささや}きました 「アンナを殺せ」 100

ヴィクターは 深く静かに流れている
川までやって来ました
「お父さん 僕はどうしたらいいですか」
川が答えました 「殺せ」

アンナがテーブルで 105
トランプを箱から抜いていました
そこに座って
夫の帰りを待っていたのです

アンナが最初に抜いたカードは 110
ダイヤのジャックでもジョーカーでも
ハートのキングでもクイーンでもなくて
逆さになったスペードのエースでした

ヴィクターは入口に突っ立って
ひと言もしゃべりません
「あなた どうかしたの」とアンナ 115
ヴィクターは まるで何も聞こえなかったかのよう

ヴィクターの左の耳にも
右の耳にも声がします
頭蓋骨の底の方でも声がします
「アンナを今晚殺すのだ」 120

ヴィクターはカービングナイフを取り上げ
顔は 憑^つかれたように引きつっています
「アンナ お前など
この世に生まれて来なければ良かった」

アンナはテーブルから跳び上がり 125
びっくりして叫びました
でもヴィクターは まるで夢に現れる殺人鬼のように

ゆっくりとアンナに迫って来ます

アンナはソファのうしろへ身をひるがえし
カーテンロッドを引き落しました 130
でもヴィクターはゆっくりとアンナに迫って来ます
「さあ ^{なんじ} 汝の創造主にまみえる用意を」

アンナは部屋のドアをねじ開け
二階に駆け上がりました
でもヴィクターは ^{のぼ}あとを追って階段を上り 135
踊り場でアンナを捕まえました

倒れたアンナを ^{また}跨ぎ
ナイフを握ったまま 立ち尽しました
血が階段を流れ落ちながら うたいます
「我こそは復活した ^{いのち}生命なり」 140

警察がヴィクターの肩を叩いてうながし
護送車で連れ去りました
ヴィクターは苔の固まりのようにじっと座って
「我は主イエス・キリスト」

ヴィクターは独房の隅に座って 145
粘土で女を作りながら
「われは初めと終わり
いつの日か この世を裁きにやって来る」

(山中光義訳)